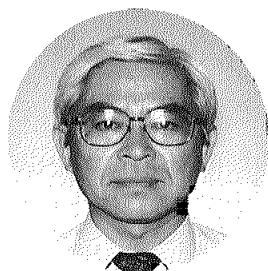


## 需要の喚起と供給サイドの 技術・技能の展開力に期待して



(財)廃棄物研究財団 専務理事 三本木 徹

今年、ライト兄弟が人類史上初めて動力飛行に成功した1903年12月17日から数えて、丁度百年に当たる。我が国が国産の飛行機を飛ばしたのは、その僅か8年後、明治維新からほぼ30年後であり、飛行機の生産が設計・施工において高度な理論と技術が必要と言われる中、このような短期間で国産能力を有したことは驚くべき事実と思われる。

しかし、我が国は技術や技能を一般に門外不出のもととして、閉鎖的な社会の中で伝承発展させてきたが、江戸時代の後期には、農業や鉱工業といった経済産業活動の分野にとどまらず文化や芸術の領域に至るまで、既に万般にわたって優れた技術や技能を持ち合わせていたことはよく知られている。例えば、貨幣の鋳造や金属製の武器製造、繊維、顔料製造、酒造、製塩、製紙、築城など、高度な技術や技能を必要とする産業が既に存在していたことから明らかである。従って、飛行機の国産能力を短期間に有したことは決して驚くべきことではない。

近代社会への扉を開けたと言われる「明治維新」の意義は様々な角度から多く語られてきているが、技術や技能の発展や展開という面から見ると、「技術情報の一般化」と「欧米の技術や論理の積極的な導入」によって、閉鎖的な社会の中で伝承発展してきたこれまでの技術や技能が社会全般に開放され、さらに発展や展開に関するモチベーションが一般化したことではないかと考えている。これは、欧米から導入した学問や技術を吸収し展開する能力が社会の中に元々備わっていたことも、これらを加速させる重要な要因の一つと考えている。その結果、基礎的な学問分野の発展と相まって、金属精錬学、発酵工学、材料学、石炭化学、治水・発電における土木技術、生産管理工学など多くの工学的な学問分野を発展させ、そして魅力ある物やサービスの供給を可能とした。これによって、需要を確実に喚起し、我が国の産業経済は飛躍的に拡大・発展した。

さて、現在、我が国はバブル経済による「失わ

---

れた10年」から立ち直る気配を感じることが出来ず、また景気の動向が先行き不透明なこともあって、多くの人々にとっては停滞感や閉塞感を強く感じている。景気の善し悪しは、経済活動の規模が膨らむ方向にあるのか縮小の傾向にあるのかによって判断されるものだが、経済活動とは何かをもう一度思い起こしてみると、まず第一に、経済活動とは、社会全体における人と人との間で行われる物資やサービスの交換・取引活動である（これらの交換・取引は、通常、貨幣という信用手段を仲介として行われるものであるが、貨幣は経済活動を数量化する手段でしかない）。第二に、経済活動を決める要素は①生産能力と生産量（供給）、②生産された物やサービスを、人々が購入する量と購入する能力（需要）である。第三に、経済活動水準は、供給能力と需要のいずれか小さいほうによって決定されるものである。つまり、経済活動水準は常に供給能力を超えることはなく、需要が決定する。

ここで重要なことは、物とサービスの「需要」は人々の欲求に基づくものであるが、これは「さらに利便性や効率性が高まって欲しい」、あるいは「珍しいので一度使ってみたい」など漠然としたものである。当たり前のことだが、具体的な物やサービスが人々の目の前に現れて来ない限り、需要は実

体化しない。したがって、需要喚起には、供給サイドがこれに応えられる魅力的な物やサービスを提供する能力を有していることが必須の事柄である。

我々が今なすべきことは、近代社会への扉を開けた時代に行われた「情報の一般化」と「新しい技術と新しい論理の導入」であろうと考える。つまり、過去から現在までに開発・蓄積された技術や技能（使用実績の有無にとらわれず）を洗い直し、これらの技術・技能の適用条件と限界性を正しく認識することから先ず始めることが必要である。そして、これらの技術情報を一般に公開することを通じて新たな情報を得る、またはこれらの技術に新しい息を吹き込む人々の輩出（モチベーションの刺激）に期待する、さらに新たな技術や論理を導入することによって、所有している技術・技能を新たな視点でその可能性を改めて考察することが重要と考えている。社会の閉塞感や停滞感は、人々の欲求がマグマ溜めのように社会に潜在的に圧縮され、大きなエネルギーが蓄積されているものとして、前向きに捉え直すこともできる。したがって、この蓄積されたエネルギーを引き出す、すなわち潜在化している需要を顕在化させるために、魅力ある物やサービスの提供に関して、供給サイドにおける技術・技能の展開力に一層期待するものである。